

新人賞候補

鈴木 四季

タチアオイ
猫が轆かれた方を向く

紫陽花の裡まで身投げの血が届く

しあわせの原義墓石と蝶と空

菜の花の群れ踏む老爺ラカン読む

春霞一振り
平家物語

はるさめを
待つ美術館
る・こるびじゅえ

ありよりのありの俺たち花火降る

レモン水
兄がときおり自慰をして

レポートを出して駅まで歩く夜
おそろくあれは二つめの月

水仙が咲いて芭蕉が旅へゆく

【選評】

安定した筆致。時に目が覚めるような表現に出会う。

新人賞候補

折原 小夜子

るらりらと 竹久夢二の顔が言う

明け方死が近い時刻君は寝てる

穂村弘
を

介入できない世界のことや、
素晴らしい女性のことを思った。

ほむらたかし
と読み続けて
10代が終わる

象見れずうなだれるわたし

みてはいけないものをみた
ような気がして何度も振り向く
何も無いラーメン屋

窓枠から夜の音がする

陰気なゴッホは本を三冊、
陽気な方はなにもくれなかった

もしわたしが
みざわさんだったり
花沢さんだったりしたら
舌切つて死にます

ポップなコーンは重くなり
雨の知らせと相成りました。

春を小脇に走り抜ける月

【選評】

枠にはまらない自由な表現でありながら表現の本質を捉えている。

新人賞候補

長谷川 柊香

上向くといつも雪片右回り

祈るように望まぬように

こすもすは

溶け出しそうな「私」
コート詰め込む朝

新入生のスーツの肩に花の雨

ベランダで春雨に指揮していたの

何度でも人に生まれて冬銀河

ニューロンに錆びつく秋思夜夜夜

教室の窓秋は永遠回帰

実験室の窓に冬が張り付いている

散る花の裏も表も死にたてで

【選評】

清潔感のある言葉とまっすぐな詠みにこれからの可能性を感じる。

奨励賞候補

亀山 一ひぎ

主文俺を死刑に処す青鷹

流星群ひたすら土下座する俺に

長袖の下の青痣冬の月

秒針と心音と溶けゆく雪と

定刻の便で発ちます冬の虹

晩夏遺書の余白が白すぎる

修司の忌ブロック塀に小便を

履歴書に小さな×をされて秋

秋灯下君は人形だったのか

夜逃げする友と見ている遠花火

【選評】

作風が確立されており完成度が高い。言葉の緊張感が心地よい。

奨励賞候補

小雪

かぼちやを食べても
私の夜は永遠に続く

夕焼けの存在を支える存在
その美しい関係に気づく人
手がかり。美への。

雨の音で
心の赤い所がオレンジになり
夕焼けにはなれない夕焼けを
作った

女として
幸せを感じた直後
この世と
さよならをしたい

冬
分母が孤独なら
分子は存在するもの全て。

彼も私を救えなかった

ドアノブを回す瞬間
世界でひとりきりだと
再確認する

行きの電車は
希望に向かつてるようで
私には恐ろしく思えてしまう

救急車が白い花に見えた
自分の眼を疑った

私の眼は正しかった

先生達
お肉を食べる
幸せそうに
陰で泣いた
学校行けない

【選評】

この著者の魅力は書かなければならないものを有している点だろう。

奨励賞候補

郡司 和斗

天の川わたしの二十年あげる

鈴虫の羽のあたりに夜がくる

赤蜻蛉文字の小さな同人誌

よく笑うおとうとに雪ふりつもる

海にきてうみの匂いの日記買う

水瓶にせずむ譜面よ笹井の忌

雪の降るたびに睫毛に魚うまれる

団地というさみしい楽器春の宵

うららかに帰宅部の列なくなる

首吊りの影のびてゆく春の暮

【選評】

定型のなかに感じられる確かな詩情。

奨励賞候補

うすしか

しんだら
みずみず
しく
なりたい

君がリップクリーム塗る音に
ぬ
は要らない
るるる
るるる

二けたのたし算をならったのに
ともだちのかずがわかりません

大丈夫一人で全然帰れます

朝になって気づく
背中みたいな
おぼけのぬくもり

ああひとりってこんなにひとり

陽を帯びて
遠ざかっていくランドセル
むげんの軌道を描きながら

ベランダに息子が作った雪の飯
煙草の灰を落として溶かす

春月を頭から食む星灯

あたし六さいでりこんしてん

はたちまでには死ぬつもり
と言う彼は
二組の彼女を迎えに行った

【選評】

言葉に対する鋭敏な感覚と独自の作品世界。

奨励賞候補

ひかるちゃん

真っ白な靴がまぶしい 一年生

きょうはあったか
あしたはどうだか
おふろもあったか
そろそろねるか

弁当を

明けたら一面
ちりめんじゃこ

自転車のカギを

なくした

意を決して

旅に出たにちがいない

あじさいが
ポツポツポツ
とさきはじめ

暑サニモ
走りコミニモ負ケヌ
ワレラ 中学生

今日の空と
昨日の空の
青がちがう。
この色は
きょうだからできた色。

「すむうず」の
平仮名文字が
あたたかい

えだまめに
ほしいしよっぱい
この涙

さえずりで
わかるよきんかん
たべごろね

【選評】

みずみずしい言葉。作品の一部には他には代えがたい魅力がある。